

関東大震災の12のこと

1

震災から【50年後】の教科書

『中学社会科 歴史 最新版』(発行:1972年)

1923年(大正12)の関東大震災によって、日本の経済は強い打撃を受け、不景気はいよいよ深まっていった。／ 関東大震災は9月1日におこった。被害は1府6県に及び、家屋全焼38万戸、つぶれた家屋8万3千戸、死者9万1千人、行方不明1万3千人、負傷者5万2千人を数え、被害は65億円をこえると推定された。また震災により、東京の人口は226万人から一時140万人に減少した。

震災から【100年後】の教科書

『中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』(発行:2022年)

1923(大正12)年の関東大震災後は、地震に強い鉄筋コンクリート製の公共の建築物が増えました。／ 1923(大正12)年9月1日、神奈川県西部を震源とするマグニチュード7.9の大地震が東京や横浜を直撃しました。各家庭で昼食の準備をしている時間でもあったため、またたく間に大火となり、死者・行方不明者10万5千人以上、被災者340万人以上という大きな被害を出しました。死者の約9割は、火災が原因だったといわれています。住宅や工場が都市に密集していたことが、被害を大きくしました。こうした反省から、大震災後に後藤新平らを中心に復興計画が立てられ、道路を広くし、避難用の公園を設けるなど、計画的に街づくりが進められていきました。一方、震災直後の混乱のなか「朝鮮人が暴動を起こす」という根拠のないうさが流れ、自警団を作った住民によって朝鮮、中国の人々や社会主義者が殺される事件も起こりました。



① 千葉県の被害・教訓

震度7相当の揺れが関東を襲い、その中でも特に被害が大きかったのが房総半島です。主に現在の南房総市・館山市では津波や火災による死者が多く出ました。安房郡全体で、死者・行方不明者1,223名、全潰10,652戸、全焼449戸、流失48戸でした。安房地域は1703年の元禄地震の際に大きな津波被害を受けており、その時の**教訓**が代々語り継がれて残っていたため、関東地震の際、住民は海水が引いたのを見てすぐ高台に逃げたということです。

過去の災害を風化させてしまうのではなく、教訓として後世に伝えていくことが被害軽減にも繋がります。

② 野島埼灯台

野島埼灯台(現・南房総市)は、日本で2番目(1870年)に点灯した洋式灯台です。関東大震災の際、地上6メートルのところで折損し、大音響とともに**倒壊**しました。現在の鉄筋コンクリートの灯台は、その時の復旧工事によったものです。なお、1703年の元禄地震では**一帯が隆起**し、孤島であった「野島」から、陸続きの「野島崎」になったという説があります。

日本には、自然災害が由来とされる地名が「災害地名」として残っている場合が数多くあります。身近な場所の地名が自然災害を由来として名付けられていないか、いちど確認してみてもいいかもしれません。

③ 房州うちわ

房州うちわは、館山市や南房総市で作られ、京都の「京うちわ」、香川の「丸亀うちわ」と並ぶ、日本の三大うちわの1つです。この房州うちわは関東大震災と深い関わりがあります。関東大震災によって、日本橋の堀江町河岸のうちわ屋の大半が**大火**に見舞われました。その職人たちは、那古港近くの船形町(現・館山市船形)に**移住**し、うちわの生産を始めました。これがきっかけで房州うちわが盛んとなり、2003年には千葉県初の経済産業大臣指定伝統工芸品にも認定されました。

先人たちが、災害を乗り越え受け継いできた房州うちわの扇ぐ風に思いを馳せながら、震災の悲惨さを忘れないようにしましょう。

④ 震災記念碑

鎌ヶ谷市役所の敷地内に「震災記念碑」があります。これは、関東大震災の翌年1924年に建立されたものです。この石碑は、災害による犠牲者を慰霊するためのものではなく、当時の鎌ヶ谷村に被害が少なく**死者が出なかった**ことを感謝する意味で、村の有志らによって建てられました。現在は、「自然災害伝承碑」として国土地理院の地図にも掲載されています。

私たちがよく目にする、歴史の負の面を記したのからその悲惨さを忘れないようにすることも大切ですが、後世のために必要な情報として過去から今に有益な情報を与える「伝承」も欠かすことができない存在といえます。

⑤ 鉄・コンクリートのまちへ

関東大震災の当時はレンガ造の建物がまだ多く存在し、地震の強い揺れにより、**レンガ造**の建物に被害が集中しました。当時の日本で最も高い建築物である「浅草凌雲閣」(12階建てレンガ造)は、関東大震災の激しい揺れにより半壊・解体されました。

また、当時の東京市15区における住家全潰は約1.4万棟であったのに対して、焼失は約22万棟で、火災による被害が大部分を占めました。これは、**木造の建物が密集**していたため、延焼が拡大したことが原因の一つと言われています。これ以降、木造・レンガ造から、鉄筋コンクリート造の建物が増えていくこととなりました。

⑥ 鉄道の被害

根府川駅(神奈川・小田原市)に、地震発生から5分後に**山津波**(土石流)が押し寄せ、駅で停車していた列車を駅舎・ホームもろとも断崖から海へ押し出しました。これにより、列車の乗員・乗客と根府川駅にいた乗客・駅職員のうち、112人が死亡・行方不明となりました。

『未曾有の大災害と地震学-関東大震災-』の中で、著者の武村雅之氏は、「根府川を襲った山津波のように時間的な余裕がある場合には、避難によって人命だけは確実に救えるので、地震後には津波だけでなく、山津波(土石流)が来ることも注意喚起する必要があります」と指摘しています。

関東大震災の12のこと

⑦ 横網町公園

横網町公園(墨田区)のある場所は当時、陸軍の**被服廠跡地**で、多くの人々が避難してきました。そこに、周囲から火災が襲いかかり、この場所だけで**3.8万人が焼死**しました。その犠牲者を慰霊するため、1930年、この場所に「東京都慰霊堂」(当時の名称は「震災記念堂」)が建てられました(その後、1945年の東京空襲による犠牲者10.5万人も慰霊)。翌1931年には、関東大震災の惨禍を永く後世に伝えるとともに、復興事業を記念して「東京都復興記念館」も併設されました。これらの場所を訪れて、震災・空襲犠牲者の冥福をお祈りするとともに、震災・復興について学んでみませんか。



⑧ 防火守護地の碑

地震発生直後から多数の火災が発生し、3日間にわたって東京を襲い、東京市(現在の23区より狭く、15区に分かれていた)の全面積の**約44%が焼失**しました。神田和泉町・佐久間町の一帯は、住民らが一致協力して、延べ30時間以上に及ぶ不眠不休の**バケツリレー**などの消火に努めた結果、奇跡的に焼失を免れました。この功績を讃えて、東京府(現在の東京都の前身)は、1939年にこの地を、「町内協力防火守護の地」として史跡に指定しました。ふだんからの近所同士の付き合いを通じて、地域の「共助」の力を高めておくことが、災害時に大きな力を発揮することにつながります。



⑨ 上野大仏

上野大仏は、かつて上野恩賜公園内にあった高さ約6mの大仏です。関東大震災の激しい揺れにより**頭部が落下・損傷**しました。太平洋戦争中、顔面部を除く頭部や胴体は、兵器等の製造に必要な金属資源の不足を補うために出された「金属類回収令」により供出され、失われました。その後、顔面部は上野の寛永寺に保管されていましたが、1972年に顔面部のレリーフが上野恩賜公園に保存・安置され、現在に至ります。胴体のない顔面部のレリーフは、「これ以上落ちない」という意味で「**合格大仏**」とも呼ばれ、受験生らの験担ぎの Powerspot になっています。



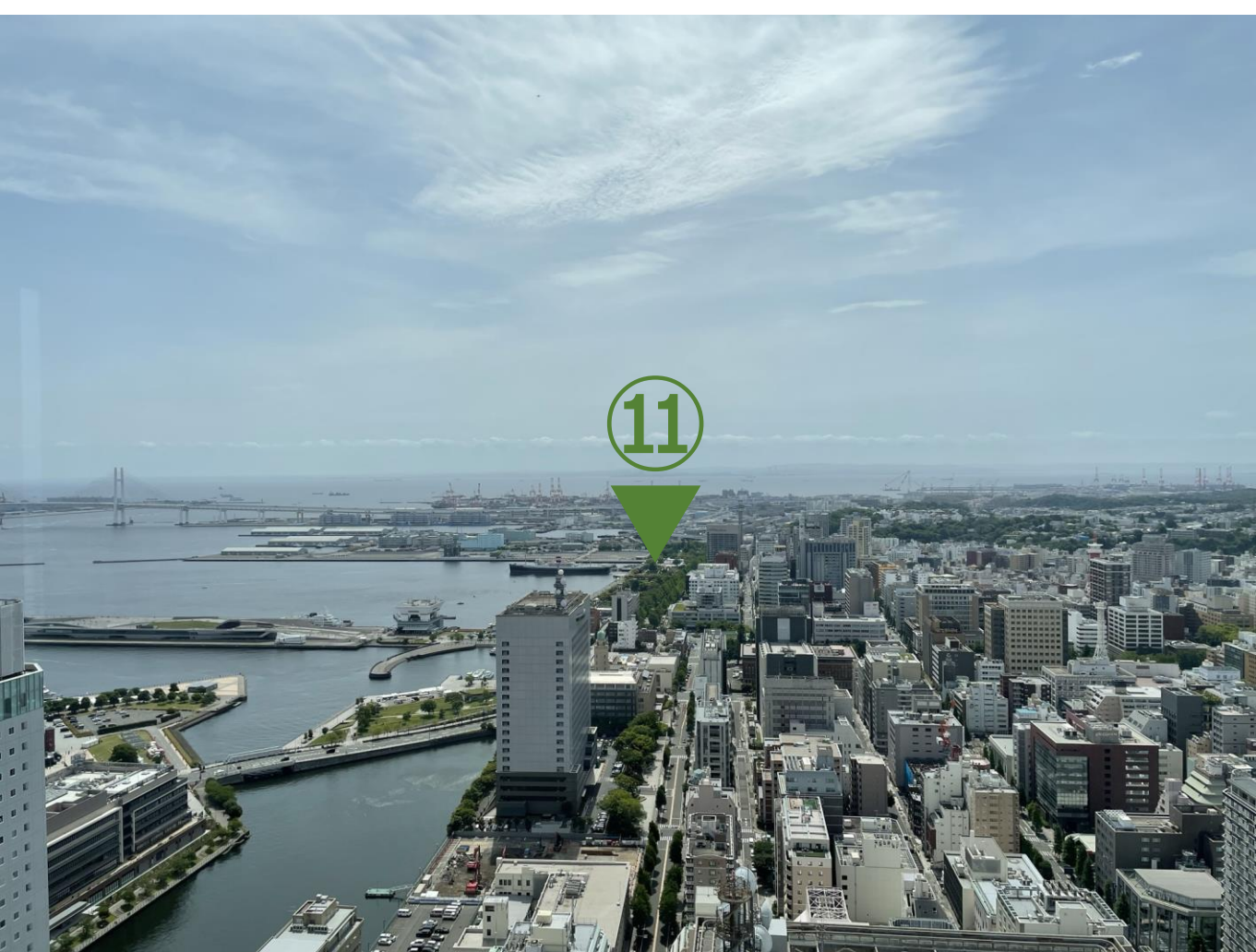
⑩ 白髭東アパート

関東大震災では、火災により多数の犠牲者が出ました。東京都は、災害に強いまちづくりを推進するため、1982年、墨田区の白髭東地区に、**防火壁**の役割を果たすように、高さ40mの住宅18棟が約1.2kmに渡って連なる「**防災団地**」を作りました。また、10万人の避難者を収容できる**避難所**(公園)も併設されています。このようなハード対策だけでなく、この団地の自治会では、さまざまな防災活動にも精力的に取り組み、防災まちづくり大賞を受賞するなどしています。将来の自然災害に備えるためには、モノで守る「ハード対策」とヒトで守る「ソフト対策」の両方をバランスよく行うことが必要です。



⑪ 山下公園

横浜市の山下公園は、海への眺望がすばらしく、記念碑や歌碑(例えば、童謡で馴染みの深い「赤い靴はいた女の子」像)など見どころの多い公園です。この公園は、関東大震災で大量の瓦礫が発生したため、その**瓦礫を埋め立て**て造られたものです。1925年から工事が始まり、1930年に開園。1935年には、「**復興記念横浜大博覧会**」の会場となり、パビリオンが立ち並び、公園前の海(船溜まり)ではクジラも泳がせたそうです。一見華やかに見える場所にも負の記憶が潜んでいることがあります。震災の記憶を風化させないためにも、一度訪れてみてはいかがでしょうか。



⑫ 日本大通り

日本大通りは、横浜市中心部の関内地区にあり、神奈川県庁などが位置する官庁街の道路です。1859年に横浜港が開港し、その7年後、1866年に発生した「**横浜の大火**」を契機として外国人居留地の大規模な区画整理が行われました。イギリス人建築家リチャード・ブラントンの設計により、1870年に日本初の西洋式街路として、横浜公園と象の鼻波止場を結ぶ街路が完成し、1875年に「日本大通り」と名付けられました。当初は都市景観のためではなく、**火除地・防火帯**としての機能を持たせることを意図して設計されました。現在の銀杏並木は、関東大震災後の復興事業で整備されたものです。

